

諫早市こどもの城
実績報告書 Vol.13

～一つの区切り～

令和3年度

こどもの城が開館して、13年が経とうとしています。開館後13年間務めてきた館長が、この春に定年退職を迎えます。そこで、一旦、この13年間の出来事の中からいくつかについて、ふりかえってみたいと思います。

第1章「13年間の成果から」

開館当初の子どもたちの今

まず、子どもたちの変化についてふれてみます。

13年間ということは、開館した時に生まれた子どもが、今、中学校1年生になったということです。もう、ミルクを飲むことも、オムツを替えることもありません。これまで13年間、市内の小中学校や高等学校に出前するという取組を行ってきましたが、その際に「こどもの城に来たことがあるか」と問えば、多くの（学校・学級によっては、全部の）児童生徒が手を挙げます。また、開館当時の小学生は、今や成人されています。そのうち、「入籍しました」と挨拶に来てくれた方もおられます。さらに、開館当時の高校生は、今や親となり、こどもの城を利用されている方もおられます。中には、高校生の頃からボランティア体験を重ね、その後、職員となり、利用者の母親となって継続的に利用されている方もおられます。職員経験のあるこの方が来られると、スタッフが意図的に出番を創り出し、子どもたちの前で、ダンスの指導をしてくれます。市民によって、こどもの城の運営が助けられ、それが引き継がれていることを感じます。

こうして、ふりかえってみると、子どもの施策は次世代の親の施策に繋がっているのだなど、あらためて感慨深いものがあります。

数的データから

13年間で重ねた数的なデータもふりかえってみましょう。

まず利用者数ですが、平成21年度から新型コロナウイルス感染拡大により長期休館する前の平成30年度までの10年間で、のべ1,037,126人の利用がありました。一年の平均利用者数は、その10分の1にあたる、約10万3千人となります。なお、団体として利用した数は、2,747団体で、一年間の平均が約275団体となり、ほぼ開館日に1団体が利用（または市内への出前や市外・県外への講師派遣を含む）されました。例えば、学校の宿泊学習など、これまでの実績や制度のない中で、これだけの団体が利用されることは、開館前には到底考えられないことでした。PTA、子ども会などの青少年団体、子育てグループ、各種の学校（特別支援学校・小学校・中学校・高等学校・大学・専門学校）、そして各種研修（教員・公務員・病院・福祉施設・保育所・幼稚園など）と、多様な団体が、実績のなかったこどもの城を利用され、ともに学ばれました。

また、この10年間ののべボランティア数は、4,473名でした。一年間の平均が、約447名となり、開館日より多いボランティアの方々に支えられてきました。開館当初は11名のスタッフとボランティアの方々によって支えられていましたが、本業を離れてまでボランティア活動をされる方々に依存していたという実態がありました。そこで、さらなる充実を目指して、現在は市職員と会計年度任

用職員合わせて17名のスタッフ数で運営することになりました。

さらに、こどもの城に子育てや教育に関する相談に来られた方々の数は、平成23年度（市議会から助言をいただき、同年度から相談件数を記録）から30年度の8年間に782件ありました。一年間の平均が、約98件になります。相談機能を全面に掲げていない施設ですが、こどもの城を頼って来られた方の数は、少なくないと思います。

こうして、ざっと数字を並べてみるだけでも、こどもの城がいかに市民の皆様に愛されてきたかを痛感します。興味深いこととしては、こどもの城の広報宣伝費用が、毎年0円であることです。開館以来、多くのテレビ・ラジオ・新聞などのメディアに取り上げていただきましたが、やはり利用された方からの口コミが最大の広報宣伝効果だったようです。これからも、市民の皆様に愛される施設でありたいと思っています。

“助けられる人”から“助ける人”へ

この章では、最後に、いわゆる「母親ボランティア」についてふれてみます。

こどもの城を利用したり、相談に来られたりする方については、前述しましたが、いつの頃からか「私、ボランティアします!」という意志を持たれ、こどもの城での研修を受講した後、ボランティア活動をされている母親が次々と現れてきました。

これらの方々は、元々、利用者であり、相談に来られた方々です。かつては、自身の子育ての悩みや苦しさを語っていましたが、子どもたちが成長していくことに伴い、かつては“助けられる人”だった方々が“助ける人”に変身し、赤ちゃんを抱くなどして、自身の経験談を自分よりも若い母親に笑顔交じりで語ってくれるのです。いわば、支援の連鎖が起こっているのです。開館前には誰も予想しなかったことと思いますが、「市民とともに創り続ける」という開館前の方針が具現化された特筆すべきことだと思います。諫早の親たちの底力、素直に凄いと感じます。

第2章 「13年前と変わった景色」

本章では、13年前の開館時にはなかったもの、言い換えてみると、13年間で変わったもの、生まれたものについて取り上げてみます。

利用者の持つ道具

利用者の（大人が）持つ道具の中で、はた目にも、13年前と変わったものがあります。その代表格の一つとも言えるのが“スマホ（スマートフォン）”です。利用者の親が、我が子の成長記録を収めようと、両手でスマホを操作し、写真や動画を撮る風景が日常的に見られるようになりました。スマホは持ち運べるので、時には、森の中でも、大きな蔓にぶらさがる我が子の写真を撮影することも可能です。かたや、運転中にスマホを見ていて事故を起こしたり、「歩きスマホ」という言葉が生まれたり、道具の便利さとともに、人間が注意すべきことも発生してきました。

こういったスマホの普及と相まって、今や小学生でもスマホを所持していることが珍しくありません。このような現象から、子育てや教育の観点から、どうやって道具と付き合っていくかということ、大人がともに考えていく機会が増えました。時には、こどもの城に親子で来ているのに、スマホでゲームに興じている父親を見かけることもあります。スタッフが、さりげなく話しかけ、父親を遊びに誘うと、慌てて画面を消したり、逃げるようにその場から去ったりする風景も見られるようになりました。こどもの城は、子どもたちが生きる力を培うために、大人もともに学ぶことを目指した施策です。「今、ここ」ではスマホは不要なこともありますね。

木を切るために開発されたノコギリで釘を打とうとすると、ノコギリが割れてしまうことがあります。道具には開発された目的があり、道具は目的外で使用すると危険なこともあります。道具の普及と相まって、こどもの城でも継続的に考えていきたいと思えます。

なお、こどもの城には、13年前と変わらず、事務室を含めて手書きの文字がたくさん書かれています。道具の特性を考えながら、紙と鉛筆という道具も意識的に使っていることを付しておきます。

《参考》

心は外に助けがなければ、記憶も思考も推論もすべて制約を受ける。だが、人間の知には、高い柔軟性と適応力、そして自らの限界を超えるために道具や方法を創り出すすばらしい能力が備わっている。我々を心の外から助けてくれるものの中で、最も重要なものは紙と鉛筆、そしてそれに対応する読み書きのスキルだろう。だが、ありふれたものより珍しいものが目立ってしまうというわけで、それらが強力なツールだと気づかれることもない。もっと言えば、文字や数、持ち運びが可能になるペンと鉛筆、そして安価で機能的な紙の発明こそが、論理的な思考とテクノロジーにブレークスルーをもたらしたのだとは、ふつう思いもよらないのである。「人を賢くする道具 ソフトテクノロジーの心理学」D. A. ノーマン

周辺樹木の成長や自然災害

こどもの城が建築される前は、この地は、スギやヒノキの針葉樹が植えられている場所でした。建築と合わせて、多くの広葉樹が植樹されましたが、13年前は、まだ幼木でした。時が経ち、第一章でふれた子どもたちの成長に合わせるかのように、今や大きく育ち、周辺の自然環境の多様性を形成しています。子どもたちの多様性を大切にしているこどもの城にもどことなく似ています。実の成る樹木も多く、秋にはドングリがたくさん落ち、シイの実を拾って焼いて食べる活動も取り入れるなど、利用者が季節を感じながら自然体験を楽しむのに、貴重な役割を演じてくれています。開館直後に市内の団体が植樹されたクヌギには、夏にはクワガタも見られるようになりました。

ただし、自然は人間に恵みを与えてくれるだけではありません。時には、人間に厳しさをもたらします。近年の気候変動による自然災害は、13年前には見られなかったように感じます。雨や風による甚大な災害のおそれもあります。自然の中で子どもたちが生きる力を培うことを目指したこどもの城としても、自然の驚異について、利用者に啓発しなければならない役割を担います。これからも周辺の自然環境に畏敬の念を抱きつつ、運営していきたいと思えます。

2つのオリジナル曲

開館して4年目に、ふと思ったことがあります。学校には校歌があり、自然の家のような青少年教育施設には所歌があります。ところが、こどもの城にはそういった類のテーマ曲がなかったのです。諫早市独自の施策として進めてきましたが、ふとテーマ曲を作ってみたくなりました。タイミングよくメロディも浮かび、2曲を作詞作曲し、発表してみたところ、意外にも評判がよく、以来、多くの方々に愛されてきました。

1曲目は、施設そのものをテーマとした曲で、いわば校歌や所歌にあたるものとして発表した「たからもの」という曲です。こどもの城は子どもたちのための施設ですから、やはり世の中の子どもたちに関する情報が気になります。とある土地で、子どもたちの遊ぶ声が騒がしいということで、住民が訴訟を起こしたというニュースを目にしました。こどもの城では、日々、騒々しいほどに(?) 子どもたちが声を発します。時には、奇声を発する子どもが目立たないほどです。そんな中、子どもたちの遊ぶ声が騒がしくて、裁判が起こることは、児童施設の職員として少なからずショックでした。当事者ではないので、このニュースに関するコメントはできませんが、断片的に受ける情報から、「子どもたちのことを大人が嫌いになってしまったのかな」という疑問を抱きました。そこで、歌詞の冒頭に、この疑問を投げかけ、子どもたちをめぐる世相を否定的に表現しました。続いて、そんな疑問をかき消すかのように、「そんなことない！」と子どもたちから返してもらった歌詞にしました。以下、「たからもの」の歌詞です。

たからもの

いつからだろうこの国が 子ども嫌いになったのは
よその子どもと絡まない 絡めないから笑えない

そんなことないよ！
そんなことないさ！

ふらっと来れば遊ぶとこ
ねらって来れば深いとこ
弄られ、揉まれ、集（たか）って来いよ
白木峰の風が 森が 光が
こどもの城で待ってる 呼んでる 笑っている

僕のふるさと諫早は 水をたたえた川の町
命をかけた人々は 家も支えた手をとって

それを忘れない！
それを思い出そう！

ふらっと来れば遊ぶとこ
ねらって来れば深いとこ
生きる力 育てに来いよ
白木峰の空が 虹が 星が
こどもの城で待ってる 呼んでる 笑っている

2曲目は、施設に来る利用者からの相談をテーマにした「おかえり」という曲です。相談の内容は様々ですが、その主体は大人です。時には子育ての悩みや、苦悩を語られる方も少なくありません。そういった大人たちに何らかのメッセージを寄せられないかと思って作詞作曲してみました。冒頭で、子どもたちが、大人にとっての「いい子」だったということが並びます。そして、それが褒められます。ただ、「いい子」にしていなかったとしても、一人一人の子どもの存在そのものが褒められてほしいという願いを込めて、「もう一つ褒めてあげたい」と続きます。ちなみに、何かいいことをした時だけ褒められることを、精神医学などでは「条件付きの愛情」と言うそうです。条件を付けずに、子どもたちを愛する大人でありたいと願いを込めて、バラード調の曲に仕上げました。バラード調なので、賑やかなこどもの城よりも、講演会などの際に、会場の参加者と歌うことが多く、たくさんの方々が涙ながらにいっしょに歌う姿を数多く目にしました。なお、この曲には、アメリカから市内に来られていたALTの先生、韓国からウエスレヤン大学に来られていた留学生、ドイツから文部科学省の交流事業で来られていた母親が、それぞれの母国語で訳詞され、国が変わっても、子どもを思う気持ちは同じということを表現した仕上がりになっています。以下、「おかえり」の歌詞です。

おかえり

いい子にしていたよ
成績がよかったよ
試合で活躍したよ
よかったね
でも、もう一つほめてあげたい
それは・・・
君がそこにいること
おかえり ～ ～ ～

安心できるから
挑むことができる
それが力になるよ
いつの日か
でも、もう一つ応援したい
それは・・・
失敗しても君が好き
おかえり ～ ～ ～

第3章 「13年前と変わらぬ景色」

前章では、13年前と変わったこと、生まれたことについてふれましたが、本章では、13年前と変わらないことにふれてみます。

歌声・笑い声

開館して11年目の終わり頃から、新型コロナウイルスの感染拡大に伴って、臨時休館したり、人数制限したり、こどもの城もその影響を受けましたが、それでも、子どもたちの声が響く場所、それがこどもの城です。大きな声で歌うことは避けなければなりません、それでも、日曜祝日には、子どもたちや大人たちの歌声が館内で聞こえます。開館以来、ずっと続けてきた“こどもの城バンド”という名称の歌の時間です。スタッフが歌い聴かせるだけでなく、多くの子どもたちが、前に出て歌ったりダンスをしたりして、盛り上げてくれます。それを応援する大人の掛け声もまた、会場を盛り上げてくれます。こどもの城は、人とふれあう場所。今後も、この時間を続けていきたいと思っています。

ところで、子どもが親や他の子と遊んでいるときに、一番よく言うセリフって何でしょう？ 数えたわけではないので、一番多いかどうかは不明ですが、それは「見て～（Look at me）」ではないかと感じます。子どもたちって、否、大人も時として、自分のことを見てほしいのですね。これもまた、13年前と変わらぬ景色です。こどもの城が開館する限り、利用者の皆さんとともに、今後も歌声・笑い声が響く施設を作っていきたいと願っています。

支え合い

子育て中は、時として、親の方がくたびれてしまいそうになることがあります。子どもを愛していることに疑いの余地もないのですが、親も人間です。体調がすぐれない日もあれば、気分が沈んでしまう日もあります。そんな時、こどもの城に来られる他所の親が助けてくれる場面を何度も目にします。利用者の全ての親がくたびれているわけではありませんので、「他所の子も我が子」とばかりに、抱っこしてくれたり、遊び相手になってくれたりという大人がいます。傍から見ると、まるで本当の親子のようですが、初めて会った人だったということも珍しくありません。この景色もまた、13年前と変わりません。こどもの城は、一応、遊具を設置していますが、「人」と遊ぶところです。時には、要らぬ世話と思われることがあるかもしれませんが、他者のかかわりが、くたびれそうになる親を助けることになるなら、それは、要らぬ世話というよりも“必要なお節介”だと思います。親を助けることで、多くの子どもたちの成長に好影響を及ぼす事例もたくさん生まれてきました。その一例が、第一章で紹介した「母親ボランティア」でしょう。こどもの城を通して、このような支え合いが自然に生まれてくる社会でありつづければいいなと思います。

在り方

こどもの城は、これからも市民をはじめ利用者に愛される施設でありたいと願っています。そのためには、前述のように、利用者自らの行動によって支えられることも不可欠です。そんな利用者に対して、スタッフができることの一つが、利用者を迎える気持ちで現場を視る、診ることです。手前みそになりますが、目立たぬ場所で動いてきたスタッフの姿を紹介します。実は、開館以来、勤務の始業時間前に、毎日欠かさず館内に花を飾ってきました。また、開館時刻2時間前から自身の出勤時に、屋外の遊具などの点検を続けてくれているスタッフもいます。利用者が少しでもいい体験の時間を過ごしてほしい、そう願って続けてきたスタッフの気持ち、これもまた13年前から変わっていません。

また、いい体験にかかわる考え方の一つが、遊びに関することです。前述したように、こどもの城は人とかわかり、遊ぶことを勧めてきました。幼少期の自然体験や他者とふれあう体験が、その後の人生によい影響を与えるということも言われます。そのため、こどもの城では、「遊ばせる」という考え方ではなく、自発的に「遊ぶ」ということを大切にしてきました。遊びは、創造的・共同的であってほしい、スタッフはそう願って屋外を点検し、館内に花を飾ってきました。今後も、こどもの城が在る限り、この在り方は変わりません。

13年前の開館セレモニーの時、子どもたちが歌ってくれた「とっても大切なもの」という曲の終わりの歌詞を紹介して、今後も変わらぬ決意とともに、この章を締めたいと思います。

あゝ わ いさはや 我が諫早 とわ さち 永遠に幸あれ

はは 母なる故郷 ふるさと い～さ～は～や～